

トマス・アキナスの vanitas 概念  
A Concept of 'Vanitas' in Thomas Aquinas

山口 隆介

Yamaguchi Ryusuke

要 約 または 要 旨

本稿の目的は、トマス・アキナスが「コヘレトの言葉」1章2節に依拠し理解するところの vanitas 概念がいかなるものかを明らかにすることである。

まず1において、中世カトリック世界における「コヘレトの言葉」の伝統的な位置づけを確認し、「コヘレトの言葉」1章2節に依拠した vanitas 概念が一般的にどのようなものと言えるかを見定める。

次に2において、vanitas 概念の継受史において画期となるサン・ヴィクトルのフーゴの vanitas 理解を概観する。

最後に3において、トマス・アキナスの vanitas 概念の特徴をサン・ヴィクトルのフーゴおよびボナヴェントゥラとの比較の中で浮かび上がらせようと試みる。

聖書註解者としてのトマス研究は、必要性が指摘されながらわが国では十分な展開がなされていない。本研究が、聖書註解者としてのトマス理解を深める一端となるなら望外の喜びである。

## 1. 「コヘレトの言葉」とその1章2節の伝統的理解

1.1 「コヘレトの言葉」の位置づけ理解の歴史 —ヒエロニムスからトマスまで<sup>1</sup>

*vanitas* は、中世カトリック世界においては「コヘレトの言葉」*Ecclesiastes* の冒頭（第1章第2節）の聖句 *vanitas vanitatis* の註釈において深められてきた概念である。

中世カトリック世界における「コヘレトの言葉」への註釈の歴史はヒエロニムス *Hieronymus* に始まる。筆者の研究した範囲では、ボナヴェントゥラ *Bonaventura*、トマス・アクィナス *Thomas Aquinas* まで系譜を確認しているが、彼ら以降にもおそらく註釈の歴史は続いていることと思われるが、本研究ノートでは、*Bonaventura*、*Thomas Aquinas* までの *vanitas* 解釈の歴史について現時点までで分かっていることを書き連ねていきたい。

まず中世カトリック世界における「コヘレトの言葉」の位置づけについて振り返る。中世カトリック世界においては、「箴言」「コヘレトの言葉」「雅歌」は、ソロモンの著作と信じられ、三巻一組の構想で書かれているとされていた。その構想とは、「箴言」が青年に務めを教え、「コヘレトの言葉」が熟年にこの世の空しさに気づかせ（そして世を蔑ませ）、「雅歌」が老人をキリストと結びつけるというように、段階的に神に向かっていく構成になっていることである。

そして、ヒエロニムスはこの三巻の書を順に、倫理学 *ethica*、自然学 *physica*、論理学 *logica* を教え、解説するものであるとする。倫理学が、この世の務めを教えるものであることに説明の必要はあるまい。しかし、なぜ、自然学がこの世の空しさに気づかせるのかというと、すべてのものは過ぎ行き、世界もその終わりに向かって衰えていくということが明らかになるからであると、ヒエロニムスの文言からは考えることができる<sup>2</sup>。

論理学がキリストと結びつくことに対応している理由はより一層分かりにくい。ヒエロニムスよりも後の著作家は、神学 *theologica*、*theologia* や観想 *theoria*、*contemplatio* などと呼んでいるがこの方が分かりやすい<sup>3</sup>。論理学と言われているのは、神学や観想と同じく、物質世界から離れた知であるという意味であろう（しかしながら、*logica* という語には当時、何か特殊な意味があったのかもしれない。この点はさらに調査が必要であろう）。

ヒエロニムス以降、「コヘレトの言葉」に註解を付けるなど論じてきた神学者は、*Migne*

を参照する限り、Salonius Viennensis Episcopus、Alcuinus、Walafridus Strabus、Petrus Damianus、Rupertus Abbas Tuitiensis、Hildeburtus Cenomanensis、Honorius Augustdunensis、そして、Hugo de S. Victore すなわちサン・ヴィクトルのフーゴーであるが、このうち Rupertus、Hildeburtus には見るべきものはないが、他の著作家たちはすべてヒエロニムスの影響下にあり、その図式を、ヒエロニムスの表現を反復するレベルで引き継いでいることが確認できる。

トマスも上記の図式は受け継ぐが、それを説明するのに、新プラトン主義の哲学者すなわち異教の哲学者であるプロティノス Plotinos の概念を用いているのが彼の独自性と言える。すなわち、「箴言」「コヘレトの言葉」「雅歌」はそれぞれ、(プロティノスの概念そのままならポリスの徳というべきところかもしれないがここは) 市民的徳 *virtus politicae*、浄化的徳 *virtus purgatoriae*、浄化された精神の徳 *virtus animi purgati* に対応させられている。すなわち、この世での務めが市民的徳に、この世の空しさに気づかせることが、この世から浄化される徳に、そしてキリストに結び付くということは、精神の浄化の完了であると位置づけていると言える。

## 1.2 中世カトリック世界における「コヘレトの言葉」1章2節の *vanitas*

前節から、ヒエロニムスからトマスまでの中世カトリック世界の歴史における「コヘレトの言葉」理解については次のように言える。「コヘレトの言葉」は、この世的完成を経て、物質世界の空しさを知ることで、この世から浄化されていく段階の教えを説く書物として理解されてきた。そして、この書の中心概念が空しさ、すなわち *vanitas* である。

*vanitas* はヒエロニムスでは、物質的存在の可滅性である。いずれ滅ぶがゆえに空しいとされる。それ自体としては確かに存在する。「創世記」によれば、神が創造し、見てよしとしたものである。しかしながら、神に比べるなら無に等しいものであり、それゆえに空しいもの、*vanitas* であるとされる。すなわち、変化しいずれ減んでいくという可変性、可滅性が「コヘレトの言葉」の語っている *vanitas* であるとされているのである。そして、この物質世界の空しさから離れ、「雅歌」で語られる *theoria*、*contemplatio* すなわちキリストとの結びつきへと促すというのが「コヘレトの言葉」のメッセージである。

## 2. *Vanitas* 理解の画期 —サン・ヴィクトルのフーゴー—

しかしながら、この解釈はサン・ヴィクトルのフーゴーによって深化する。

サン・ヴィクトルのフーゴー以前は、vanitas について、可変性にのみ言及している。すなわち、すべての被造物は移ろいゆくものであって、神に比べるなら無に等しいということが「コヘレトの言葉」註釈の歴史の中で繰り返される。サン・ヴィクトルのフーゴーは、vanitas を、自然の vanitas、罪の vanitas、罰の vanitas に分類した。すなわち、可変性の vanitas、秩序に反する欲の vanitas、そして死に至る vanitas である<sup>4</sup>。

自然の vanitas は、サン・ヴィクトルのフーゴー以前から指摘されていたすべての被造物が可變的であるということである。可變的であるということはそれがそれまでそれではなかったものに向かうということであり、端的には無に向かうということである。この傾向は人間の精神面においては、神から逸れて永続しないものを求める欲求、すなわち秩序に反する欲求となってあらわれる。そして、永続しないものに幸せを求めるということは精神自らも永続しないことを望むということである<sup>5</sup>。

死ぬこと、すなわち滅び去ることは、物質的世界においてはすべての自然がそうであり、人間も身体に関しては同様である。しかしながら、神の恵みによって人間は滅びを超えていた。だが、精神が自らの滅びを望んだがゆえに身体もまた恵みを失い滅んでいく。

それゆえに、可變性の vanitas は罪の原因、秩序に反する vanitas は罪、死の vanitas は罪への罰という構造を持つ。以上が、サン・ヴィクトルのフーゴーが vanitas に見出した体系である。これは言うなれば、被造物が自然本性的に持っている vanitas が、神の意図しない方向に展開することで罪の vanitas が生じ、その帰結として罰の vanitas すなわち悲惨さの vanitas が生じるということであろう<sup>6</sup>。

この体系はボナヴェントゥラにも受け継がれた。ボナヴェントゥラは、その『「コヘレトの言葉」註解』で、自然の vanitas、罪の vanitas、罰の vanitas の区分を見いだしている<sup>7</sup>。ちなみに、ボナヴェントゥラの『「コヘレトの言葉」註解』が、カトリック世界におけるそれまでの「コヘレトの言葉」註解の歴史を踏まえていることは、クワラッキ版の Scholion でも言及されている<sup>8</sup>。そして、特にサン・ヴィクトルのフーゴーからの影響が顕著であることも、無論のこと、指摘されている。

ボナヴェントゥラの『「コヘレトの言葉」註解』は、クワラッキ版の Schema I を参照する限り、「コヘレトの言葉」がその全体を通じて、自然の vanitas、罪の vanitas、罰の vanitas について論じていると見なしている<sup>9</sup>。すなわち、1章3節から3章15節までで自然の vanitas、3章16節から7章23節までで罪の vanitas、7章24節から12章7節

までで罰の *vanitas* について論じている（もちろん、ボナヴェントゥラは「コヘレトの言葉」を複数の角度からも註解しており、上記が当註解に見出せる唯一の図式ではない<sup>10)</sup>）。

ボナヴェントゥラの『「コヘレトの言葉」註解』は、その体系性と、社会全体にまで及ぶ視野、そして、*vanitas* をいやす手段が「薬」*remedium* として、*vanitas* の種類によっては提示される<sup>11)</sup>という実践性などから、詳細な研究を要する書物であると言える。

### 3. トマス・アキナスの *vanitas* 理解

トマスは、ボナヴェントゥラと同時代人であり、当然、サン・ヴィクトルのフーゴーの *vanitas* 論より後の時代に属するが、サン・ヴィクトルのフーゴーの影響をどの程度受けていたかは、直ちには明らかにはならない。一つには、トマスは「コヘレトの言葉」への註解を書いていないため、*vanitas* についてまとめて論じた箇所がないという資料の制約のためである。ヴィヴェス版の索引を頼りに、「コヘレトの言葉」の1章2節についてトマスが言及している箇所を探索するなら、認識の暗さ *obscuritas* について自然、罪、罰のトリアーデが語られている<sup>12)</sup>。自然の *vanitas* は神に比べればすべての被造物は無に等しいということなので、いわば、被造物の不完全性である。可変性、可滅性が被造物の持つ不完全性の一面であるの同様に、認識の暗さも認識能力を持つ被造物の、神と比べての不完全性の一面であると言える。神は完全な認識能力を持っており、それと比べるならどのような被造物の認識もやはり暗いものである。しかし、この箇所には「コヘレトの言葉」1章2節の引用はなく、トマスの *vanitas* 概念を知るヒントになるかは不詳である。

トマスが、「コヘレトの言葉」1章2節を引用しつつ、*vanitas* について直接語るトリアーデは以下のものである。すなわち、実体がないがゆえに、すなわち偽物であるがゆえに空しいというもの、そして堅固さ、確固たるものがないがゆえに、可變的であり空しいというもの、最後に、目的に到達しないがゆえに空しいという3つである<sup>13)</sup>。これは、被造物が自然本能的に持っている空しさが展開した形（罪や罰）としての空しさとしての提示とは言い切れない。その発想があったとしてもそれは背後に退いていて、表面に出ているのは純然たる語義解釈とすら言える。

ただ、この実体がないゆえに空しいという *vanitas* は、サン・ヴィクトルのフーギーにも見出される *vanitas* である。サン・ヴィクトルのフーギーは、可變性の *vanitas* は2通

りの仕方でものごとに見出すことができると考える。すなわち、それが有していないものを示す vanitas と、それが有するものにとどまっていな vanitas とである。後者すなわち過ぎ行く vanitas は形相のみあるが本質 *essentia* がないゆえのこととされるのに対し、前者すなわちうつろな *inanes* すなわち偽の vanitas は、何らかの本質を有するが実体がないゆえのこととされる<sup>14</sup>。したがって、トマスにおける上述の偽物である vanitas を実体がないがゆえのこととする議論は、フーゴの議論を引き継ぐものであると思われる。

目的に到達しないゆえに空しいというものは、フーゴとのつながりを現時点では確認できていない。しかし、哲学的にはフーゴの言っている罪の vanitas および罰の vanitas とは重なると考えることができる。正しい目的を指さない欲求によってなされる行為が罪であり、その結果、永遠の至福という目的に到達しなくなることが罰だからである。そして文献的には、罪の vanitas との重複が確認できる。

トマスは『詩編 註解』の4編註釈の2節で「コヘレトの言葉」1章2節を引用しつつ、vanitas を2通りに分類している。一つは時間的な *temporalia* すなわち可変的な vanitas であり、一つは目的に達しない vanitas である<sup>15</sup>。そして、この目的に達しない vanitas をトマスは *dilectio prava* 歪んだ愛と呼ぶ<sup>16</sup>。そして、その例として、満たされることを求めて富を欲することが挙げられている。このことは、ボナヴェントゥラが、『コヘレトの言葉』註解』5章2項から6章の初めにかけて、富をさげすむべきことや強欲について論じている<sup>17</sup>のと呼応する。つまり、目的に達しない vanitas は少なくとも罪の vanitas には重なっている。

トマスはボナヴェントゥラと異なり、vanitas にサン・ヴィクトルのフーゴに由来する、神に創造された自然としての可変性（これは vanitas であるが同時に *bonum* でもある (Eu) から、罪である誤った欲望の vanitas が生じ、罰として死の vanitas (空しさを求めたがゆえに自分自身が空しくなる) が生じるという体系性（これはそれをいやすイエスの救いのわざにまで開かれている）を語らない。トマスは vanitas については実体がない偽物であること、可変的であること、目的に達せず無意味であることを見いだしている。可変的であることはフーゴやボナヴェントゥラでは自然本性的な vanitas であるが、トマスが *De Malo* の当該箇所論じているのは、容易に滅ぶ善（つまり富や名譽、評判、娯楽などの地上的な善）で栄光あるものとなってもそれは空しいということであり

18、文脈的に、物的被造物はすべて自然本性的に移ろいゆくということではなく、地上的善はどれほどリアルに見えても移ろいゆくものだから頼みにならないということを示している。つまり、そのような善に固着する人間の歪んだ欲求とセツトの概念である。

したがって、次の推測が成り立つ。フーゴー、そしてその *vanitas* 概念を継いだボナヴェントゥラにおいて *vanitas* は、自然本性の *vanitas* である可変性・その誤用としての罪の *vanitas* である歪んだ欲求・その結果としての罰の *vanitas* である死という体系をなしているが、トマスは原罪以後の人間のありようの中で *vanitas* を捉える視点に立っている。それゆえに、トマスが *vanitas* について述べている可滅性や時間性は、物的被造物の自然本性という面は確かにあろうが、純粋にそのレベルではなく、物的被造物のみに固着する「世俗性」と対で捉える概念となっている。

その意味ではフーゴー、ボナヴェントゥラの体系性を哲学的深化と見るなら、そこから後退した部分は確かに持っている。しかしながら、1.2 の結びを思い起こすならば、可変性としての *vanitas* を、それから離れるべき空しさである面に集中して解釈することは「コヘレトの言葉」のソロモンの三巻の書内における伝統的な位置づけにはむしろ忠実なのである。

そこからさらに以下の推測を試みに提示する。トマスは、確かに *vanitas* についてフーゴーの図式をそのままは受け継がなかった。しかし、トマスの提示している *vanitas* 概念のうち、実体がないがゆえの *vanitas* が、フーゴーが述べるところの、本質はあるが実体はない *vanitas* を引き継いでいることが確認できるように、フーゴーの議論をトマスは押さえたうえで、図式は引き継がないという選択をしている。そしてそれは、おそらくは「コヘレトの言葉」のソロモンの三巻の書内の伝統的な位置づけにより忠実であろうと意識した結果ではなからうか<sup>19</sup>。

以上が、現時点まででトマスの *vanitas* 概念について分かっていることであり、中間報告としてここで擱筆する。

## 文献表

1. Thomas Aquinas, *De Malo*, in: *Doctoris Angelici Divi Thomae Aquinatis Sacri Ordinis F. F. Praedicatorum Opera Omnia*, vol.13, apud Ludovicum Vivès, 1889, p.320-368

2. Thomas Aquinas, De Commendatione et Paratitione Sacrae Scripturae, in; Opuscula Theologica, vol.1, Marietti, 1954, pp.435-439
3. トマス・アキナス『聖書の勧めとその区分』竹島幸一訳, 『中世思想原典集成 14 トマス・アキナス』(平凡社, 1993年) pp.33-47 所収(訳者解説 pp.28-32, 訳注 pp.48-52)
4. Thomas Aquinas, Summa Theologiae I, q.1-q.49, in: Sancti Thomae Aquinatis Doctoris Angelici Opera Omnia Iussu Impensaue Leonis XIII P. M. Edita, tom.4, Roma, 1889
5. Thomas Aquinas, Summa Theologiae II-II, q.1-q.56, in: Sancti Thomae Aquinatis Doctoris Angelici Opera Omnia Iussu Impensaue Leonis XIII P. M. Edita, tom.4, Roma, 1895
6. Thomas Aquinas, In Psalmos David, in: Doctoris Angelici Divi Thomae Aquinatis Sacri Ordinis F. F. Praedicatorum Opera Omnia, vol.18, apud Ludovicum Vivès, 1889, p.228-556
7. Bonaventura, Commentarius in Ecclesiasten, in: Doctoris Seraphici S. Bonaventurae S. R. E. Episcopi Cardinalis Opera Omnia Iussu et Auctoritate R.mi P. Aloysii a Parma Totius Ordinis Minorum S. P. Francisci Ministri Generalis Edita Studio et Cura PP. Collegii a S. Bonaventura ad Plurimos Codices MSS. Emendata Anecdosis Aucta Prolegomenis Scholiis Notisque Illustrata, Tomus VI, Quaracchi, 1893, pp.3-99
8. S. Eusebii Hieronymi, Commentarius in Ecclesiasten(PL23, 1063-1174)
9. Hugo de S. Victore, In Salomonis Ecclesiasten Homiliae XIX (PL175, 113-256)
10. 山口隆介「トマス・アキナス『聖書の勧めと区分』における「ソロモンの書」理解 —伝統との一致と独自の前進—」、『聖泉論叢』

---

<sup>1</sup> 本節の内容は山口(2021)に全面的に依拠した。より詳しくは同研究ノートを参照のこと。



<sup>2</sup> S. Eusebii Hieronymi, *Commentarius in Ecclesiasten*(PL23、1065 - 1066),“...reco-  
gitans autem omnia pertransire, et mundum suo fine senescere, solumque Deum id  
semper esse quod fuerit, compellor dicere non semel, sed bis: Vanitas vanitatum, et  
omnia vanitas.”

<sup>3</sup> 山口 (2021) 参照。

<sup>4</sup> PL175, 118, “Tria igitur sunt genera vanitatum, quas liber iste specialiter  
prosequitur, in quibus omnem vanitatem complectitur: et omnia, quae sub sole fiunt,  
his subjacere testatur. Prima est vanitas mutabilitatis, quae omnibus rebus caducis  
inest per conditionem. Secunda est vanitas curiositatis sive cupiditatis, quae mentibus  
hominum inest per rerum transeuntium et vanarum inordinatam dilectionem. Tertia  
est vanitas mortalitatis quae corporibus humanis inest per poenalitatem. Prima ergo  
vanitas naturalis est, et apta sive congrua. Secunda vanitas culpabilis, quia perversa.  
Tertia vanitas, poenalis et misera.”

<sup>5</sup> PL175

<sup>6</sup> PL175

<sup>7</sup> Bonaventura, *Commentarius in Ecclesiasten*, cap.1, in: *Opera Omnia*, Tomus VI,  
Quaracchi, 1893, p99.

<sup>8</sup> Bonaventura, *Commentarius in Ecclesiasten*, cap.12, scolion, in: *Opera Omnia*,  
Tomus VI, Quaracchi, 1893, p11.

<sup>9</sup> Bonaventura, *Opera Omnia*, Tomus VI, Quaracchi, 1893, p.100

<sup>10</sup> Bonaventura, *Opera Omnia*, Tomus VI, Quaracchi, 1893, p.101-103

<sup>11</sup> Bonaventura, *Commentarius in Ecclesiasten*, cap.5, a.1; a.2; etc..., in: *Opera  
Omnia*, Tomus VI, Quaracchi, 1893, p.42; p.46; etc...

<sup>12</sup> Cf. ST, II-II, q.5, a1, ad2.

<sup>13</sup> Cf. De Malo, q.9, a.1. c.

<sup>14</sup> PL175, 120

<sup>15</sup> Cf. In Psalmos, ps.4, a.2.

<sup>16</sup> Cf. In Psalmos, p.4, a.2.

<sup>17</sup> Bonaventura, *Commentarius in Ecclesiasten*, cap.5, a2 -cap.6, in: *Opera Omnia*,  
Tomus VI, Quaracchi, 1893, p46-50.

<sup>18</sup> Cf. De Malo, q.9, a.1. c.

<sup>19</sup> もちろん、ボナヴェントゥラは1章2節の *vanitas* 解釈より後の註釈では、聖句に  
応じて地上的な善への執着についても論じているので「コヘレトの言葉」のメッセージには  
忠実である。

